

高 学 年 委 員 会

研究主題

目的に応じて、文章全体から内容や要旨を把握し、自分の考えを広げるとともに書き手の意図や思考を想定して表現技法に気付き自分の表現に活用できる「生きてはたらく言語力」を育てる。

－ 実生活へつなげる言語活動の実践・評価・開発 －

I 研究主題について

1. 研究主題設定の理由

高学年では、小学校生活のまとめとして、これまで学習した読むこと的能力を一層充実させ、確実に身に付けることが重要である。また、児童の生活の中では、楽しむために読む、調べるために読む、知的欲求を満たすために読むなどいろいろな目的で読むことが多くなる。目的に応じて文章を読む場合、今まで身に付けた能力を生かして書き手の意図や内容を把握する必要がある。また、現状や過去の経験などから様々な情報を取り出して関係付けて考え、自分の考えを形成しなければならない。そして、国語科で身に付けた言語の能力を他の教科や道徳・領域や日常生活の中でも活用できる「生きてはたらく言語力」を育成するため、自ら判断した結果を相手に分かりやすく表現したり、考えを交流してよりよい考えに高めたりしなければならない。

そこで、高学年委員会の研究主題を「目的に応じて、文章全体から内容や要旨を把握し、自分の考えを広げるとともに書き手の意図や思考を想定して表現技法に気付き自分の表現に活用できる『生きてはたらく言語力』を育てる。」とした。

2 研究の視点

児童が学習目標に到達し、言語の力を身に付けることができる授業を創造するため、実践・評価・開発に着目し、次の視点から研究を進めた。

研究の視点	具 体 的 方 策
視点① 付けたい力を分析し、明確化・系統化を図る。	<p>○児童の実態把握に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童のレディネスを把握するために、前単元の学習内容と児童の実態を把握する。 既習の指導事項やその定着度をレディネステストで測ったり、初読の状況を把握したりして、既習事項の整理を行う。 <p>○単元の関連に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> 指導内容の系統を踏まえて、前単元と本単元、次単元の関連付けを図る。 年間指導計画や小学校の課程において付けたい力やそれを支える既習事項の位置づけを明確にする。 <p>○指導目標の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指導目標を分析し、付けたい力の重点化・精選化を図る。 説明的な文章では、「目的に応じて要旨をとらえながら読む能力」「筆者の意図や思考を想定しながら、文章全体の構成を把握し、自分の考えを明確にする力」をつける。また、「序論―本論―結論」「現状認識―問題定義―解決―結論―展望」などの構成や、「頭括型」「尾括型」「双括型」についても理解できるようにする。 文学的な文章では、「目的に応じて内容をとらえながら読む能力」「登場人物の相互関係から人物像やその役割、内面の心情もとらえる力」をつける。また、「状況設定―発端―事件展開―山場―結末」などの構成についても捉えるようにする。 <p>○既習の学習内容(身に付けた力)を生かすことに関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1次において、既習の学習内容を想起させ、本単元で活用できるように意識づけさせる。(一人学び等のワークシートなどで身に付けた力を第Ⅱ次で活用できるようにする。)

<p>視点②</p> <p>付けたい力にふさわしい言語活動を開発・設定し、主体的な学びを構築する。</p>	<p>○言語活動の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・付けたい力のための言語活動になっているのか、種類や特徴を分析する。 ・自分の課題を解決するため、意見を述べた文章や解説の文章など(本、新聞、雑誌、地域の情報誌、リーフレットなど)を利用し役立てることができるようにする。 ・目的に応じて、本や文章を効果的に読む力(比べ読み・速読・摘読・多読)を育てる。 ・幅広い読書をさせ、相手に伝わるような推薦の文章(本の帯、広告カード『ポップ』、ポスター、読書郵便、リーフレット、パンフレットなど)を書かせる。 ・資料を効果的に活用し、意図を明確に伝えるプレゼンテーションができるようにする。 <p>○単元構成の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が見通しをもって主体的に学習できるようにする。 ・児童自身がこの単元で、どんな力が付くのか分かるようにする。 <p>○「交流の場」の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「読みの課題」に対する自分の考えやそう考えた理由を書く時間を保障する。 ・一人一人の感じ方の違いに気付くことができるようにするため、自分の考えとの共通点や相違点に気を付けながら、本や文章を読んで考えたことを交流させ、自分の考えを広げたり深めたりさせる。 ・自分とは異なる友達の意見や共感したこと、新たな気付きをノートに書かせる。 ・児童の思いや考え、そう考えた理由が効果的、効率的に交流できるように「ワークシート」やノートを活用させ、話し合い活動の形態(ペア・グループ・学級)や方法を工夫する。 ・指導者が話し合いをコーディネートしていくために、主発問や補助発問や助言を工夫する。 ・考え方の道筋が分かるノートの書き方を工夫させ、必要であればＩＣＴ機器を活用する。 <p>○課題解決のための思考について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思考の道筋として「比較、順序、理由付け、定義付け、推理(推論)、多面的に考える」などの方法を活用できるように助言し、思考を深めさせる。 ・他教科や日常生活において、課題解決のための思考が活用でき、その思考が生きて働くことを実感できるようにする。
<p>視点③</p> <p>指導事項と言語活動を踏まえた評価基準の設定と評価の在り方を明確にする。</p>	<p>○自己評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童自身が身に付けた力を実感し、次の学習に生かそうとする意識をもつことができるようにする。 ・毎時間学習課題を明確にもたせ、課題が振り返りの視点となるような評価をさせる。 ・1時間ごとに学習の成果と学び方について振り返るだけでなく、単元全体を振り返るときにもノートを活用させる。 ・交流して相互評価したり、学習後の自身の変容について自己評価したりさせる。 <p>○評価基準について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導者のねらいと児童の学習課題を一体化させた評価基準になるように目標設定をしっかり行う。 ・言語活動の中に、付けたい力が位置付けられているかどうかの評価基準を設定する。 <p>○指導者の評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使った情報や「関係付け方」は、正しく選択・判断されているかをノート等で確かめる。 ・自ら行った「思考・判断」の結果や経過を、他者に伝わるように適切に表現できているかをノート等で確かめる。 ・付けたい力に沿った言語活動であったかについて指導者が評価し、次への改善を図る。

II 研究内容

1 「目的にあった本を選んで収集した情報を活用し、

表現技法を使って効果的に伝え合う学習」

(単元名:『和の文化』マイスターになろう(「和の文化を受けつぐ」中山圭子 東京書籍 5年)

(1) 指導のねらい

<※マイスターには「名人」「技能士」という意味がある。>

<単元の目標>

- 「和の文化」に関連する本を読み、自分なりにとらえた「和」の文化のよさを資料を活用し、調べたことを効果的に伝えようとする。
- ・文章の内容や要旨を伝えるのにどのような表現の工夫が使われているのか、考えながら読むことができる。
- ・知識や情報を関係付けて、事柄が伝わるように構成を工夫して話すことができる。
- ・『和の文化』マイスターになろう」をするために目的や意図にあった文や資料を選んで自分の考えをもつことができる。

<教材の関連>

前教材「くらしの中の和と洋」(東京書籍)、「ウナギのなぞを追って」(光村図書)では、写真、図表、地図などと文章を対比させながら、段落どうしのつながりに気をつけて読んだ。読む際には、興味をもったところを中心に本文を要約し、紹介し合う活動をした。この活動を通して、教材の構成や表現をそのまま生かして短くまとめる方法や教材の言葉と自分の言葉で短くまとめる方法を学ぶことができた。

本教材「和の文化を受けつぐ」では、前単元で学んだことを生かし、筆者が「表現の工夫を通してどのような内容を伝えたいのか」を考えることができる学習課題を設定する。児童は必ず課題に対する自分の考えをもった上で、その意見を交流する。交流の形態として、児童一人一人の考えを整理するためにペア学習をした後、全体交流を中心に学習を進めた。話し合いで深まった「表現の工夫」を付箋に書きためておく。これらの学びを並行読書時の『和の文化』調べで生かし、『和の文化』マイスターブック」作りに生かせるようにした。

次教材「町の幸福論ーコミュニティデザインを考える。」では、町の未来について考えたことをプレゼンテーションする。前単元・本単元で学んだことを生かし、自分の考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、資料を活用し、収集した知識や情報を関係付ける学習である。ここでは、「筆者の考え方」を活用することを重点において、「幸せな町」は「どんな町か」について考えることができるようにする。ペア・全体交流を通して、一人一人の感じ方や考え方の違いを児童同士が気付けるようにする。

(2) 授業の実際

視点① 付けたい力を分析し、明確化・系統化を図る。

- 児童のレディネスを把握するために、前単元の学習内容と児童の実態を把握する。
- 既習の指導事項やその定着度をレディネステストで測る。
- 指導内容の系統を踏まえて、前単元と本単元、次単元の関連付けを図る。
- 指導目標を分析し、付けたい力の重点化・精選化を図る。
- 説明的な文章では、「目的に応じて要旨をとらえながら読む能力」「筆者の意図や思考を想定しながら、文章全体の構成を把握し、自分の考えを明確にする力」をつける。また、「序論ー本論ー結論」などの構成について理解できるようにする。
- 第1次において、既習の学習内容を想起させ、本単元で活用できるように意識づけさせる。

本教材「和の文化を受けつぐ」は伝統的な文化に関するものの中でも想起しやすい和菓子を題材とした、「序論」「本論」「結論」が明確な文章である。また、和菓子が「中国や西洋の文化」「国内の年中行事や茶道」「和菓子作り職人・和菓子道具や材料職人、食べる人」の様々な影響を受けて発

展し、今に受けつがれてきたことを、具体例を順序立てて挙げたり、写真を用いたりすることでわかりやすく述べられた説明文になっている。

本実践では、「表現の工夫」「書き手の意図」の2点の読み取りに焦点を絞り、それぞれの段落や論で「どのような表現の工夫を使ってわかりやすく『和の文化』を説明しているのか。」を考えながら読むことができるようにした。文章と図・写真を比較しながら読み進めるように支援することで、内容や書き手の意図（要旨）を把握する力を児童に身に付けることができると考えた。

第Ⅰ次の1時では、児童の実態を把握するためにレディネステストを実施した。片方を知識・技能面、もう一方を興味・関心面が把握できるようにした。

知識・技能面では、前単位「くらしの中の和と洋」の内容を読み取るテストを実施した。

興味・関心面では本教材文に対する初発の感想や和の衣・食・住で想起できることを書けるようにした。

これらのレディネス状況をもとに本学習の指導や支援に役立てることができた。例えば、小集団の編成や支援に役立てた。加えて、「一人学び」のワークシート作りに役立てた。その内容とは、「一人学び」を生かして第Ⅱ次の学習課題の解決に活用すると共に、既習の学習内容を想起させるために項目を以下の4点に絞った。

- 1 点目：むずかしい言葉やわからない言葉を調べる
- 2 点目：要旨を捉えるために文章構成図を書く（資料①）
- 3 点目：表現の工夫を見つけよう
- 4 点目：写真や図に何が書かれてあるか、見つけよう

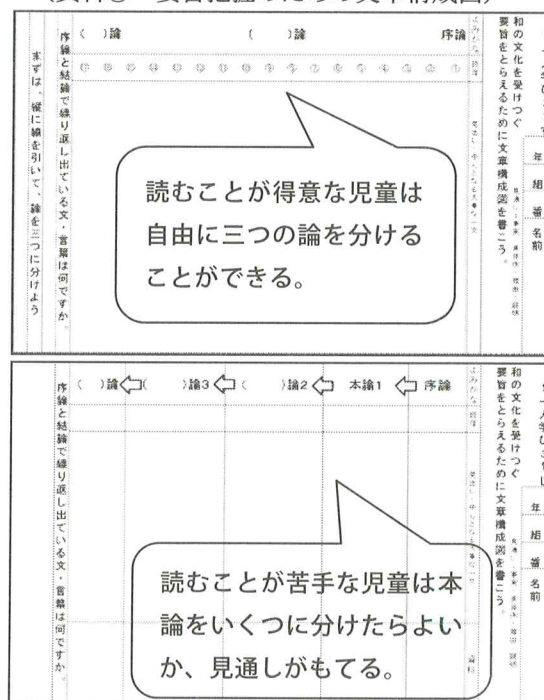
第Ⅱ次の学習課題を解決する際、「一人学び」を振り返ることで、自力で「表現の工夫」や「書き手の意図」に気付くことができた。このように第Ⅱ次の学習課題の解決に生かすことができた。

視点② 付けたい力にふさわしい言語活動を開発・設定し、主体的な学びを構築する。

- 付けたい力のための言語活動になっているのか、種類や特徴を分析する。
- 児童自身がこの単位で見通しをもって主体的に学習できるようにし、どんな力が付くのか分かるようにする。
- 「読みの課題」に対する自分の考えやそう考えた理由を書く時間を保障する。
- 自分とは異なる友達の意見や共感したこと、新たな気づきをノートに書かせる。
- 児童の思いや考え、そう考えた理由が効果的、効率的に交流できるように話し合い活動の形態や方法を工夫する。
- 思考の道筋として「比較、順序、理由付け、定義付け、推理(推論)、多面的に考える」などの方法を活用できるように助言し、思考を深めさせる。

主体的な言語活動になるためには、目的意識をはっきりさせる必要がある。教科書の言語活動は「和の文化について調べて説明しよう」となっている。しかし、「何のために調べて説明するのか」がはっきりしない。そこで、『和の文化』マイスターになろう」とすることで、目的意識をもって学習を進められるとともに、単元全体の見通しをもてるので、学習意欲を維持できると考えた。

（資料① 要旨把握のための文章構成図）



第Ⅰ次では、児童がこの単元で、どんな力がつくかわかるように指導者が作成した『『和の文化』マイスターブック』を例示した。例示を読む際には、図や写真などの資料があるときとないときとを紹介した。そうすることで、『『図や写真』があるときの方が内容をより正確に伝えることができる』ことを体感することができた。そして、児童が常に見通しをもって学習をすすめることができるように指導計画を掲示（資料②）した。

付きたい力にふさわしい言語活動として、

第Ⅱ次（4，6，8時）では、「表現の工夫」を見つけて、内容を読み取った（習得）。その次の時間（5，7，9時）では、並行読書を行い、自分の伝えたい「和の文化」を調べ、前時で学んだ表現の工夫を生かし、説明文にして、付箋に書き、『『和の文化』マイスターブック』（資料⑤）にためていった（活用）。このようにⅡ次では「習得」「活用」「習得」「活用」というように習得と活用を交互に指導計画を位置づけて学習をすすめていった。そして、得た知識や技能を効率よく活用し、思考力を高めるために付箋に書く色や大きさを以下の2種類に分けた。

○水色の付箋（小）＝「接続語や文末表現、文と写真の効果を書く。」（資料③）

○黄色の付箋（大）＝「紹介したい『和の文化』について調べ、整理したことを書く。」（資料④）

資料③：小さい付箋（青）に表現の工夫を書き、この付箋を見ながら左に説明文としてまとめる。

青の付箋を見て、黄色の付箋に活用できている。

大きな付箋を拡大した物（結論）

ブックカードに「書名」「調べた文化」「使いたいページ」「わかったこと」「資料（観点）」をメモしておく。

このカードに説明したい「和の文化」の情報を書きためておくことで、自分の課題解決の見通しを常にもって学習をすすめることができた。

資料④：大きい付箋（黄）に調べたことを書き、この付箋を並び替え、構成を考える。

（資料⑤『『和の文化』マイスターブック』）

第Ⅱ次4時：序論と本論1（1～6段落）を読み、学習課題「筆者は表現の工夫を使って、どの

ようなことをわかりやすく述べているのか」を解決できるよう支援した。まず、序論と本論の違いを考えた。2段落に「＜～でしょうか。＞の『問いかけ』や「＜～みましょう。＞『語りかけ』があるため、1～2段落が序論だと思っている児童がいた。そこで、1段落と2段落、2段落と3段落を読み比べ、「段落と段落の相互の関係のつながりを考えることができるようにした【※比較】（習得）。その結果、児童は2～3段落は「歴史」について述べられている【定義付け】。したがって、2段落は「序論ではなく、本論だ。」と気付くことができた。次に、本論の読み取りでは、「＜一つ目は…、二つ目は…＞『順序が分かる接続語』」に着目しながら、読むとともに年表図と関連させながら読むことで、時代ごとの和菓子の特徴がとらえやすいことに気付くことができていた【比較・理由付け】。 ※【 】は、その活動の時に、習得する思考力を表している。

授業の最後の振り返りでは、見つけた表現の工夫を水色の小さい付箋（資料③）に書きためた。次時（第Ⅱ次5時）の並行読書では前時で学んだことをすぐに生かせるように、並行読書で調べた「和の文化」と水色の付箋に書いた表現の工夫を組み合わせ、黄色の大きい付箋（資料④）に書き、「『和の文化』マイスターブック」（資料⑤）として説明原稿を書きためた。

第Ⅱ次6時：本論2（7～12段落）の読みでは、本論1と同様の学習課題を挙げて、学習活動を展開した。まず、『一人学び』の文章構成図を用いて本論2が「自国の文化と和菓子の関わり」があることをつかむ（活用）。次に本論の読み取りでは、「また」という接続語に着目することによって、「自国の文化でも『年中行事』から『茶道』に『話題が変わっている』」ことに気付くことができた【類別・定義付け】。「例えば」があると「具体例を示している。」「その前の段落で説明している事実について書かれている。」というような意見が出た【類別・定義付け】。前後の段落を読み比べ、「例えば」という例示を表す表現の工夫に着目した。このように、表現の工夫と内容を結びつけながら読むこと【比較】で、言葉の使われ方を学ぶことができ、表現の工夫に対する理解を深めることができると同時に、筆者が伝えたいことをとらえることができた（習得）。授業の最後の振り返りでは、使いたい表現の工夫を水色の小さい付箋（資料③）に書きためた。次時（第Ⅱ次7時）の「『和の文化』マイスターブック」（活用）での説明原稿作りでは水色の付箋に書いた表現の工夫（資料③）を必要に応じて、活用することができた（活用）。（資料④）

第Ⅱ次8時：（本時）では本論1や2と同様の学習課題を挙げて、学習活動を展開した。まず、和菓子を支えている人、受けついでいる人について考えることで、本論3では和菓子を支える人々（和菓子を作る職人、道具や材料を作る人、和菓子を食べる人）について述べられていることをつかめるようにした【比較・類別】。次に読みの課題に対する自分の考えや、そう考えた理由を友だちに伝えられるように表現方法を例示した。（資料⑥）また、表現の工夫と内容をつなげて考えることが難しい児童には、表現の工夫か内容のどちらかを見つけ、ペア交流や全体交流の場で表現の工夫と内容がつけられるように助言した。

＜表現方法の例示＞

- ・○段落目に「□□」という表現の工夫を使っているので、「△△」のことがわかるようになっています。

＜児童がノートに書いた考え＞

- ・13段落目に「まず」という表現の工夫を使っている。
- ・13段落目から和菓子を支えている人は「和菓子を作る職人」だとわかる。
- ・15段落目に「ですから」と書かれているので、「和菓子を味わったり、年中行事に合わせて作ったりする。」ことがわかる。

（資料⑥ 表現方法の例示 と 児童の『自分の考えとその理由』）

一人で考える時間を設け、自分の考えをもった後、ペアで交流した。その際には、自分の意見との共通点や相違点を探しながら進めることができるように声かけを行った。そうすることで、自分の考えを整理したり、友だちから得た新しい考えをノートに書いたりして、全体での交流を活性化させることができた【比較】。また、ペアなので短時間で、課題に対する考えが比べやすくなり、表現の工夫に対する理解を深めやすくなった。さらに、友だち同士で自分の考えを声に出して確かめ

ているので自信をもって全体交流で発言する姿が見られた。考えて、発言する意欲が高まっているので、全体交流の補助発問や指示が児童の考えをさらに引き出す結果になった。このように少人数で話し合った経験を全体交流に生かすことができた。(資料⑦)

C1：15段落では、「一方」の表現の工夫を使って、「和菓子を食べている人」について説明しています。

T：そうですね。「一方」にはどのような効果がありましたか。

C2：対比です。

T：それでは、「食べている人」と何を対比させて説明しているのでしょうか。縦のペアAで話しましょう。その後、ペアBで話しましょう。

縦のペアAで話し合う。

横のペアBで話し合う。

T：話し合って、わかったことや気付いたことを発表しましょう。

C3：食べている人と和菓子を作る職人です。

C4：和菓子を作る職人だけでなく、道具や材料を作るつくり手です。

指導者が

発問→ペア交流 AB→全体交流ができるように働きかけることで、児童の考えを引き出すことができている。

(資料⑦ 第Ⅱ次 8時：本時;本論3で表現の工夫の使われ方について考える学習;逐語録)

第Ⅱ次10時：結論を読み、文章の要旨をまとめ、『和の文化』マイスターになろう」の終わりの言葉を考えた。終わりの言葉を考えることが難しい児童には、教材の結論部分で繰り返されている「受けつぐ」という言葉に着目できるようにした後【比較・定義付け】、『和の文化』を受けつぐためにどうすればよいのか。』『和の文化』をさらに発展させるためにどうすればよいのか。」を考えられるようにした【比較・理由付け】。

具体的に考えることができるように以下のような言葉がけをした。

「和の文化」を受けついだり、発展させたりするために…

- 自分がたくさん「和の文化」を知るだけでいいですか。
- あなたが「和の文化」を調べた中で、どんなことをもっと知れば、いいですか。
- あなたが「和の文化」を調べた中で、どんなことをまわりの人に伝えたらいいですか。
- 筆者は17段落で、どうすれば「和の文化」を受けつぐことができると述べていますか。

このような支援や助言をした結果、書きためた付箋から大切な言葉を拾うことで、結論に生かして、「自分らしい表現」に活用することができた【比較・定義付け・理由付け】。(資料⑨)

教材内容(上)と表現の工夫(下)を対比させることで内容と表現の関連性がわかる。

(資料⑧ 第Ⅱ次 8時：本時板書)

本時を含め、表現の工夫を見つけたり、その効果を考えたりする学習の全体交流では、教材内容と表現の工夫・効果を対比して考えることに重点を置いた。一人一人が見つけた表現の工夫や文章の内容を客観的に見えるよう板書を工夫(資料⑧)して、交流できるようにした【比較】。

その結果、序論・本論・結論のそれぞれの論で、どんな表現の工夫を使えば、わかりやすく説明

できるのか理解を深めることができた。学習が進むと、並行読書で調べた「和の文化」と学んだ表現の工夫を組み合わせるコツをつかみ、多くの付箋に説明する内容を書きためることができた。(資料④)

習得する学習と活用する学習を交互に3回繰り返したその結果、書きためた付箋を比較し、並び替え、伝えたい順序や内容を吟味することできた【比較・類別・定義付け・理由付け】ので、自分が説明したい「和の文化」を友だちに効果的に伝えることができた。(資料⑨)

本論1・論2・論3と並べて、結論を考えることができた成果。

本論1の観点：花火の歴史 本論2の観点：花火の種類 本論3：花火の祭り

「長い時をへてそれぞれの種類が多く、花火のまつりまででき伝統的な「和の文化」になってきました。」

序論

わたしたちの国には古くから受けつがれる伝統的な文化があります。それは花火です。打ち上げ花火もその一つです。花火は、日本で伝統的にあり、現代に受けつがれています。

本論

本論1

まず、あなたは花火の歴史を知っていますか？ 中国で発明された火薬は、昔はけむりをあげる通信手段として黒色火薬が使用されました。戦争が終り、平和な時代が続くにつれて、火薬の用途が変化し、花火のようになつてきました。お祭りや年中行事、たまたま打ち上げ花火として燃放しました。

本論2

次に、花火のしるしをいくつか紹介します。花火をよく知っているのは打ち上げ花火です。打ち上げ花火にもいろいろな種類があります。それは、まんげき、うなごさ、まなまな物などがあります。まんげきは中心の花火が四方に色とりどりの光の広がりがまんげきのように見えます。ほかに、しるし、花火、水の中の花火、水の上の花火などがあります。水の中の花火は水の上で花火が広がり、水の中を流れていきます。

本論3

最後に、花火の祭りを紹介します。まず、日本では、花火大会が行われます。そうが、まんげきやうなごさのものを多く、物をもつていく人が多くいます。かんきやうが、まんげきをあげることもありますが、その花火は、世界では、花火の文化になりました。

結論

このように、花火は、知るほど、おもしろい物です。長い時をへて、それぞれの種類が多く、花火のまつりまででき、伝統的な「和の文化」になってきました。

わたしたちの文化には、おもしろい物になりました。夏の花火の時に、しるしをもつて、見ては、どうでしょう。

(資料⑨ 第Ⅲ次13時『「和の文化」マイスターブック』を見て、発表用にまとめたもの)

視点③ 指導事項と言語活動を踏まえた評価基準の設定と評価の在り方を明確にする。

- ・児童自身が身に付けた力を実感し、次の学習に生かそうとする意識をもつことができるようにする。
- ・毎時間の学習課題を明確にもたせ、課題が振り返りの視点となるような評価をさせる。
- ・指導者のねらいと児童の学習課題を一体化させた評価基準になるように目標設定をしっかりと行う。
- ・言語活動の中に、付けた力が位置付けられているかどうかの評価基準を設定する。
- ・結論を導き出すのに、「関係付けた思考」が行われているかをノート等で確かめる。
- ・付けた力に沿った言語活動であったかについて指導者が評価し、次への改善を図る。

学習の流れ(資料②)やこれまでの学習の振り返りを掲示することで、学習活動への見通しをもったり、学習の振り返りをしたりする際に役立てることができた(活用)。ノートを使用する際には、教材文内容が上、表現の工夫が下に対応するように2分割した【比較】。また、ノートを見開き2ページにし、ノートの取り方をパターン化した。その結果、どこに何が書いてあるのかを見つけやすくなり、1時間の学習の流れがわかるようになった。また、自分の考えに友だちの考えを付け加えることで、友だちと自分の考えが比べやすくなり、学習課題に対する自分の考えの幅を広げたり深

めたりすることができた【理由付け・定義付け】。さらに、学習のまとめや振り返りをするとき、自分と友だちの意見で共感したことや新たな気づき【推理】を書くことができた。(資料⑩)

「ふりかえり」

上部は「教材内容」

「学習課題」

る と い る て く れ に は か い け で え が か	わ か さ ら い し よ は け ど る 杉 坂 ま さ の り	和 菓 子 の 文 化 を え る な け れ ば 一 片 か ら
和菓子の文化をえ	和菓子の文化をえ	和菓子の文化をえ

下部は「表現の工夫」※友だちの意見は(友)マークをしている。

(資料⑩ 第Ⅱ次8時のノート)

授業終了時に行う「振り返り」の書き方を例示(資料⑪)しておき、学習課題の達成状況や学習後の自身の変容について自己評価をできるようにした。毎時間、点検することで、指導者の指示や発問が授業で効果があったかを客観的に捉えることができた。(資料⑫)

「振り返り」活動で学びを実感できるようにすることで、第Ⅱ次では調べた内容の説明に、習得した表現の工夫を進んで活用することができた。(資料⑤・⑨)

③ さいしよは、…だったけど、
△△さんがうと言ってくれた
おかげで考え方が変わりました。

② ○○さんのおかげで、
このことがよくわかった。

① : がよくわかった。

自分の学びをふりかえろう 例文

- ・最初は、食べる人がどのように受けついでいるのかがわからなかったけど、○○さんが「食べる人がいなければ和菓子がなくなる。」と言ってくれたので考えが変わった。
- ・最初は、14 段落が何の説明をしているのかがわからなかったけど、○○さんの昔ながらの手作業という言葉で 14 段落目は何なのかがわかった。
- ・なぜ、写真に人の手があるのとないのとはちがいがわからなかったけど、○○さんの発表を聞いて「あ！こういうことも手作業ってわかるようにしてあるんだ。」と知ることができてなるほどと思いました。
- ・この表(ノートの内容と表現の工夫)を書くのは苦手だったけど、よく書けた。言葉の工夫は気付いても、内容は書けなかった。けど、ペア A での交流で気付くことができた。

(資料⑫ 第Ⅱ次8時の授業後の児童の振り返り)

『『和の文化』マイスター交流会』の際には相互・自己評価する視点をワークシートに記載しておき、評価したことを記録することで、どんな点が良いのかを具体的に認め合い、わからないことは質問し合えた【比較】。その結果、相手に伝わりやすくするためには「どのような表現の工夫や言葉を使えばよいのか。」「図や写真はどんなタイミングで示せば良いのか。」「一度に話す長さはどの程度がよかったのか。」を具体的に確かむことができた【類別・理由付け】。(資料⑬・⑭)

名前 / 観点(評価基準)	①	②	③	④	⑤	和のマイスターを聞いて心に残ったこと(観点をもとに)
1	A	B	B	B	A	表現の工夫が大人使われていて、わかりやすかったです。
2	B	A	A	A	A	話す時に写真を取り工夫して使っていたので、わかりやすかったです。
3	C	B	A	B	B	本論に入る時に、問を空けていて聞きやすいと思いました。
4						
☆						

観点(評価基準)

- ① 「問いかけ」「語り」「順序を表す接続語」「まとめを表す接続語」等が効果的に使えているか。
- ② 写真・図と文章が関連付けて説明されているか。
- ③ 序論、本論、結論の構成がわかるように話しているか。
- ④ 『和の文化』を支え、受けつぐ一員としての伝えたいことが明確に伝わったか。
- ⑤ 伝えたいことが聞き手に伝わるように、話し方や資料の見せ方を工夫できているか。

「和のマイスターになろう」学習を終えての感想(学んだこと・楽しかったこと・しんどかったこと)

学習していくうちに、自分の調べた「和の文化」について、みんなに発表したいと思いました。でも、資料を選ぶのがしんどかったので、次はがんばりたいです。

発表した児童は、友だちからの感想を聞いて自信を持ち、発表を聞いていた児童は、「どのようにすれば、説明したいことが伝わるのか。」と気付くことができた。

(資料⑬ 第Ⅲ次 『『和の文化』マイスター交流会』の相互評価基準が記載されたワークシート)



これまでの交流を生かし、評価基準に則り、友だちの良いところ認めたり、質問をしたりすることができている。



(資料⑭ 第Ⅲ次 『『和の文化』マイスター交流会』の様子)

学習アンケート集計結果 (高倉小(ブレ)と小路小(検証)の児童のアンケート結果)

①…そう思う ②…どちらかと言えばそう思う ③…どちらかと言えばそう思わない ④… そう思わない

(1) 教科書から「表現の工夫」を読み取った後、すぐに並行読書をする中で、表現の工夫を意識して使ったり、調べたいことを見つけ、自分の考えをまとめたりすることができましたか。

① 21人 ② 24人 ③ 6人 ④ 1人

(2) 付せんを使うことで、話す構成(序・本・結論)や自分の考えがまとめ(イメージし)やすかったですか。

① 28人 ② 19人 ③ 4人 ④ 1人

(3) 並行読書のとき「～を調べよう。」というように目的をはっきりさせて、読んだり調べたりできましたか。

① 17人 ② 24人 ③ 9人 ④ 2人

(4) この学習で学んだ説明の仕方(表現の工夫)を他の教科(社・理・算)でも使っていきたいと思いますか。

① 29人 ② 19人 ③ 2人 ④ 2人

(3) 考察(成果…○ 課題…●)

視点① 付けたい力を分析し、明確化・系統化を図る。

- 表現の工夫に着目した教材文分析を基にして、序論・本論・結論で付けたい力を明確にし、問いかけ・接続詞・文末表現・写真や図の効果を意識できる指導計画を立てることができた。
- レディネステストの内容や「一人学び」で習得したことを学習活動で活用できるように、さらに項目や内容を精選し、児童の実態にあったものを作成していく。

視点② 付けたい力にふさわしい言語活動を開発・設定し、主体的な学びを構築する。

- 習得と活用を交互に行う指導計画を設定したことで、表現の工夫を意識して並行読書をしようとしたり、説明する順序(構成)を考えたりできた。学んだことを意識して使おうとする姿勢が顕著に見られた。
- ペア(縦)A、ペア(横)Bで交流することで、限られた時間の中で自分の考えを整理したり、自分の考えに自信をもったり、新しい考えに気付いたりすることができた。
- 単元全体を通してペア交流→全体交流→ペア交流→全体交流をすることで、思考の行き詰まりを防ぎ、全体交流の活性化につなげることができた。
- 板書の際に「教材内容」と「表現の工夫」を上下に分けて書くことにより、学習のまとめで児童は学習の振り返りがしやすくなり、活用したいと思う事柄を選びやすくなった。
- さらに活用力を育てるために、指導者は教材文分析から補助発問をさらにいくつも用意しておき、考え方の違う者同士や同じ者同士で、学習のねらいに合わせたペア交流ができるようにする。
- 児童が目的に応じて、複数の本や文章などを効率よく選んで比べて読むことができるように、習熟度に応じた具体的な並行読書の提示の仕方を考える。

視点③ 指導事項と言語活動を踏まえた評価基準の設定と評価の在り方を明確にする。

- 自分や友だちの考えを書きためたノートを振り返ることで、学習内容の理解の深まりに気付くことができた。
- 評価基準を児童がわかりやすい言葉や内容にすることで、自らの学びを客観的に振り返ることができた。
- 児童に学習アンケートをとることにより、児童や授業者が「学習目標が達成したかどうか」を判断するための自己評価になった。

2. 「自分たちの町のコミュニティデザインを考え、説得力のある資料を使ってプレゼンテーションをする学習」

(単元名：私たちの町のプレゼンターになろう)

「町の幸福論—コミュニティデザインを考える」・東京書籍6年)

(1) 指導のねらい

〈単元の目標〉

- 筆者の主張や資料提示の工夫を読み取り、それを活用して自分の町の幸福論についてグループでプレゼンテーションを作成し、自分たちの町の未来に関心を持つ。
- ・ 教材文の構成をとらえ、筆者の主張や資料提示の工夫を読み取ることができる。
- ・ 複数の資料から読み取った情報を、目的に応じて活用することができる。
- ・ 意図を明確に伝えるために、資料を効果的に活用して発表することができる。

〈教材の関連〉

前単元「未来がよりよくあるために」(光村図書)では、意見を聞き合って考えを深め、意見文を書く活動を行った。自分の主張の根拠を本やインターネットから調べて、文章を書くことができた。自分の考えが説得力をもつように、聞く側の立場に立って考えることができた。「学級討論会をしよう」(光村図書)では、互いの立場や意図をはっきりさせながら、疑問点を整理して自分の意見を言ったり、質問をしたりして、討論を行った。グループごとに肯定・否定に分かれて主張し合い、考えを広げる学習をし、児童は聞き手を納得させるために、アンケートをとる、インターネットで調べるなどの方法を活用して情報を収集することができた。

本単元「町の幸福論」では、まず本文の構成をとらえ、内容や資料の効果などを読み取る。そして、自分たちの町の未来について調べて考えていくため、複数の資料から読み取った情報を目的に応じて活用し、プレゼンテーションをする活動を行う。筆者のいうコミュニティデザインという考え方を中心にししながら、2つの視点(①住民たちが主体的に町作りに取り組むということ、②未来のコミュニティをどのように思いえがくかということ)に基づいて、自分たちの町のプレゼンターになろうという言語活動をおこなう。コミュニティデザインとは、「人と人とがつながる仕組みを作り、町を元気にしていこう」という目的のもとにコミュニティを組織していくことである。

(2) 授業の実際

視点① 付けたい力を分析し、明確化・系統化を図る。

- 児童のレディネスを把握するために、前単元の学習内容と児童の実態を把握する。
- 既習の指導事項やその定着度をレディネステストで測る。
- 指導内容の系統を踏まえて、前単元と本単元、次単元の関連付けを図る。
- 説明的な文章では、「筆者の意図や思考想定しながら、文章全体の構成を把握し、自分の考えを明確にする力」をつける。また、「序論—本論—結論」の構成や、「頭括型」「尾括型」「双括型」についても理解できるようにする。
- 第Ⅰ次において、既習の学習内容を想起させ、本単元で活用できるように意識づけさせる。

児童の実態をつかむため、レディネステストを実施した。大阪市小学校教育研究会国語部作成の単元評価問題を活用して、レディネステストを説明文「イースター島にはなぜ森林がないのか」(東京書籍 6年)の単元で「読む」を中心に問題を抽出し、実施した。(実施した児童の学校は、光村図書を使用のため、「イースター島にはなぜ森林がないのか」は未習内容。)分析の結果、問いと答えを見つめることができる、筆者の主張を見つめることができる、という説明文の基本事項が十分に習得できていないことが分かった。そのため、本単元でも構成や内容の読み取りをていねいに行うことが大切になってくると分析した。そこで本単元の学習計画では、1時間の中で習得と活用を考えるのではなく、第Ⅱ次の前半の読み取りの時間で習得をした後、後半で活用の時間をとることにした。

本単元では、第Ⅰ次の2時間目に構成を考える時間を設けた。今までに学習した説明文の構成(序論—本論—結論)を思い出しながら分けていった。接続詞や内容、キーワード(繰り返し出てくる言葉)などに気を付けて、

視点② 付けたい力にふさわしい言語活動を開発・設定し、主体的な学びを構築する。

- 自分の課題を解決するため、意見を述べた文章や解説の文章など（本、地域の情報誌など）を利用し役立てることができるようにする。
- 資料を効果的に活用し、意図を明確に伝えるプレゼンテーションをできるようにする。
- 児童が見通しをもって主体的に学習できるようにする。
- 児童の思いや考え、そう考えた理由が効果的、効率的に交流できるように「ワークシート」やノートを活用させ、話し合い活動の形態（グループ・学級）や方法を工夫する。
- 考え方の道筋が分かるノートの書き方を工夫させ、ICT機器（タブレット端末）を活用する。

本単元では「私たちの町のプレゼンターになろう」という言語活動で、「目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと」や「目的や意図に応じて事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話すこと」ができる言語の力を付けたいと位置付ける。

児童が見通しをもって主体的に学習に取り組むことができるように、第1次の1時間目では、この学習で最終的にどんな言語活動をするのかという学習の見通しを伝えた。そして、まずプレゼンテーションのイメージがもちやすいように、指導者が自分の町を題材にプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの例を実際に目の前で見ることによって、児童はこれから自分たちが学習することをより理解することができた。指導者が作ったプレゼンテーションのシートを教室に常掲し、どんな流れでプレゼンテーションをしていくのかを示した。（資料③）

1 ページ目

発表の進め方

0.現状

1. 始めの言葉
2. 事例①
多摩川の河川じき（東京都）
3. 事例②
荒川の河川じき（埼玉県）
4. 現状の問題点
5. わたしたちの提案

2 ページ目

0. 現状

せまい範囲の利用

利用者は一部の人

町全体を明るくしたい

3 ページ目

1. 始めの言葉

わたしたちがえがいた未来の町

河川じきを
多くの人が利用し
笑顔になる町

4 ページ目


2. 事例① 定期的な清掃活動
多摩川の河川敷（東京都）



参考にしたいこと
・河川じきを定期的に掃除する
⇒美しい河川じき

5 ページ目

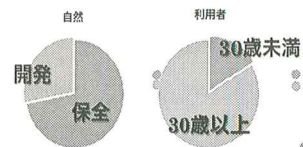
3. 事例② 住民が考えたイベント
荒川の河川敷（埼玉県）



参考にしたいこと
・多くの人が足を向けるきっかけ
⇒小さい子も参加

6 ページ目

4. 現状の問題点
地域の人へのアンケート



7 ページ目

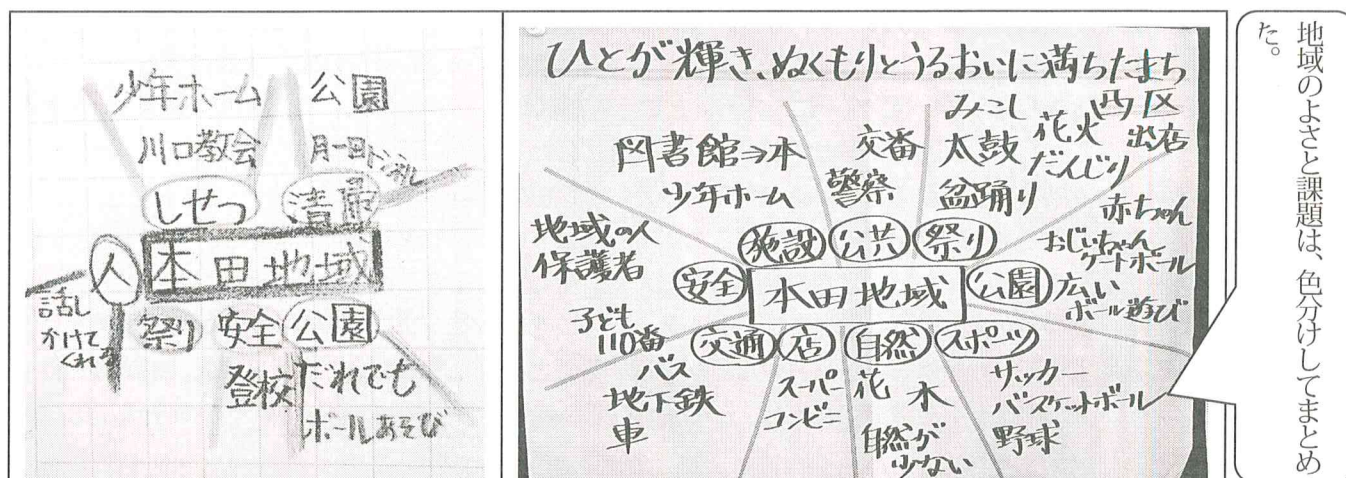
5. わたしたちの提案
提案の内容

1. 掃除をする日を決める
2. 草刈りをする
3. イベントを定期的にする

河川じきを
多くの人が利用し
笑顔になる町

（資料③ 指導者が作ったプレゼンテーション）

児童の学習意欲をさらに高めるために、区長によるメッセージビデオを見せる。自分たちの区では、どんな希望あふれる未来をどのように目指しているのかを話していただく。児童はビデオを見て、本教材のキーワードである「人と人とのつながり」が希望あふれる未来の町には大切だということを理解し、目的意識をもって学習に臨むことができた。メッセージビデオを見た後、自分たちの町のよさや課題について話し合った。まずは、自分の町がどんな町なのかについて考え（資料④－１）その後、全体で出し合いまとめていき、教室に常掲した。児童が自分たちの未来の町を思い描くときの手立てになるようにした。（資料④－２）



（資料④－１ 児童が町の未来を考えた時に書いたマップ）

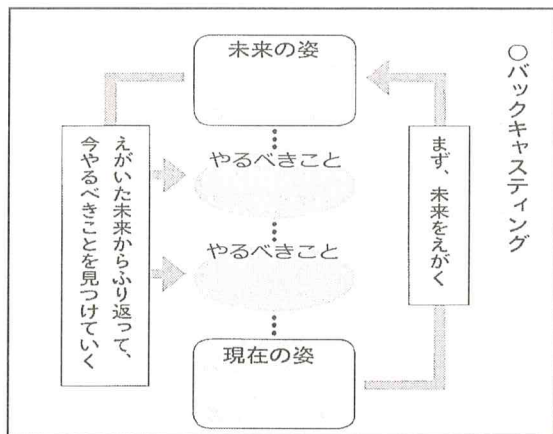
（資料④－２ 全体共有した本田地域のよさや課題）

第Ⅱ次の１、２、３時間目では、教材文と向き合い、筆者の主張や考え方を学習する習得を中心とした学習を行った。

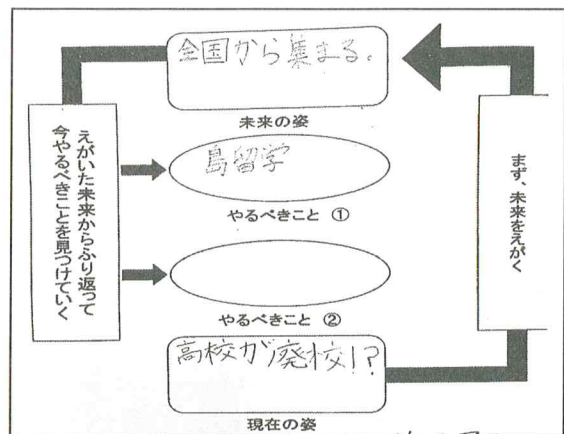
第Ⅱ次の１時間目では、本論１の内容を読み取った。まず、筆者は「コミュニティデザイン」という考え方が、町に住む人々が豊かで幸福になるためには重要であると述べている【＊定義づけ】。そのことを理解した上で、次にコミュニティデザインで重要なことの１つ目「住民が主体的に町作りに取り組むこと」を説明するために、２つの事例が挙げられており、その事例をもとに内容を読み取った。また、資料は、写真・グラフ・表があり、内容にあった資料を挙げることで、説得力が増すという資料の効果も理解することができた。このことは、最後に自分たちがプレゼンテーションをするときに役立つ情報であることも共有した。資料の効果も教室に常掲し、手立てになるようにした。

第Ⅱ次の２時間目では、本論２の内容を読み取った。本論２ではコミュニティデザインで重要なことの２つ目「未来のイメージを持つということ」を説明するために、１つの事例が挙げられており、その事例をもとに内容を読み取っていく。「未来のイメージを持つということ」を詳しく説明するために、図が用いられている。それが、バックカスティングという考え方である。バックカスティングというのは、まず未来をえがき、その未来から現在をふり返って、今やるべきことを見つけていくというものである。本時では、まず教科書に書かれているバックカスティングの図（資料⑤）を理解し、次に、事例として挙げられている海士町の取り組みをバックカスティングの図にあてはめるとどうなるのかを考えた（習得）。（資料⑥）いきなり図に言葉をうめていくのは難しいので、まず海士町の現在の姿、未来の姿、やるべきことの３つを色分けし、教科書に線を引かせた。そして全体で共有し、確認していった。しかし、読み取りの課題が２点ある。１つは「島留学」の言葉の意味の理解、もう一つは「海士町のよさを生かし、卒業後は日本の社会を支える人材に」というような、大きな未来の姿を深くイメージさせることができたかどうかである。その後、バックカスティングの手法を自分の町を使って考えてみた。個人で考え、ペアで交流しながら考えた上で、全体交流した。海士町の事例を使って、バックカスティングの考え方を理解し、書き方も習得したので、自分たちの町を考えて書くときは、それを活用して書くことができていた（活用）。（資料⑦）

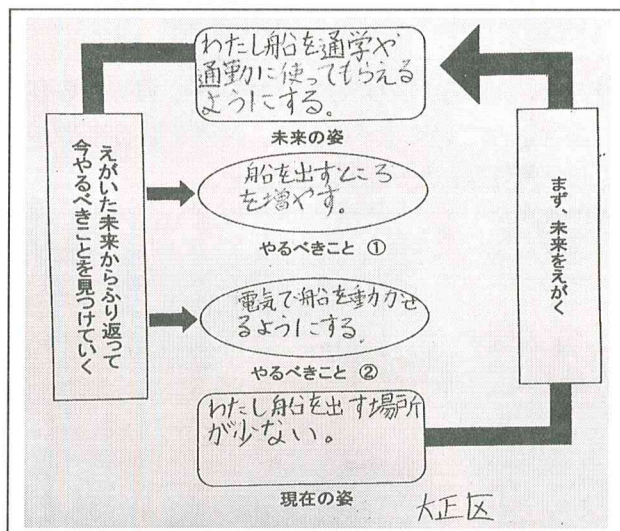
＊【 】は、その活動の時に、習得する思考力を表している。



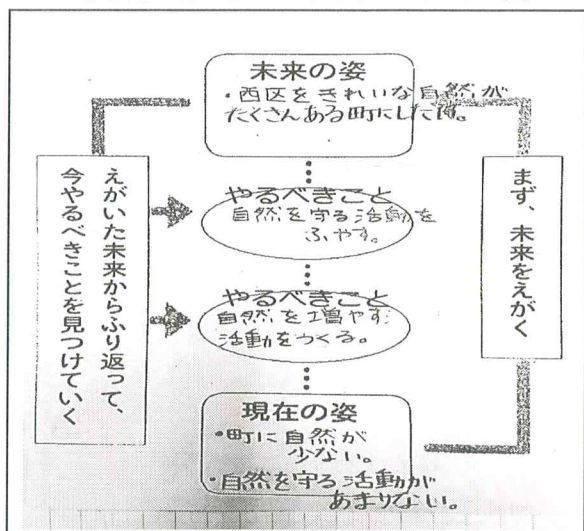
(資料⑤ 教科書のバックキャストिंगの図)



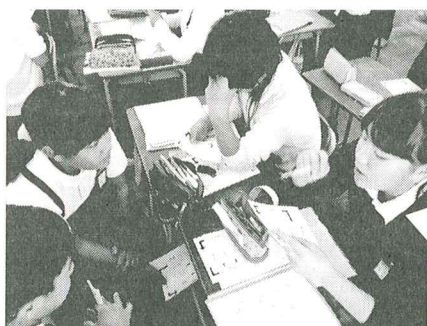
(資料⑥ 海士町のバックキャストिंगの図)



(資料⑦ 児童が考えた自分の町のバックキャストिंगの図)

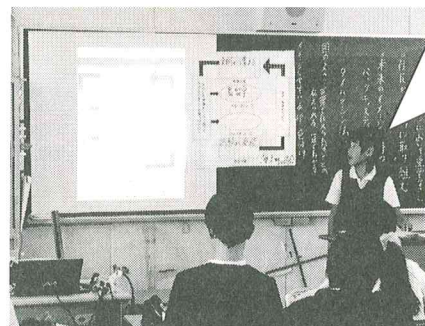


授業の中では、ペアやグループで話合う機会を多く設けた。第Ⅱ次の学習では、ペア交流を取り入れることにより、なかなか一人では思いつかなかった児童が友だちのアドバイスを受けて、書くことができるようになった。また、グループで話し合いをすることにより、自分たちの意見を交流し合い、さらに良い未来の町の提案を考えることができた児童もいた。(資料⑧、⑨)



資料⑧バックキャストिंगを使って
グループで話し合いをしている様子

「私の考えと、〇〇さんの考えをくっつけたら、すごくいい未来の町にならない？」



資料⑨バックキャストिंगの図を使って
全体交流している様子

「ぼくは、まず～な未来の町をイメージしました。そのために今からできることは～です。」

第Ⅱ次の3時間目は、文章の要旨をとらえ、自分たちの未来の町について考えを書く活動につなげている。筆者は、結論の部分で、「現実の延長線上に答えがないのであれば、自分で答えを作ってしまうでもいい」と述べている。それは、バックキャストिंगを踏まえての筆者のメッセージになっている。そのことを理解し、自分たちの未来の町について考えを書き、次時からの学習へつなげるようにした。

第Ⅱ次の4～8時間目は、プレゼンテーションをするために複数の資料を集める。意図に合った必要な資料を精選し、スライドを作成する（活用）。同じテーマで発表するグループを作り、グループ内で役割分担をして取り組んだ。必要な資料は、並行読書している本（写真⑩）や、リーフレット、インターネットから取り出した。膨大な情報を効果的に読むために、本や文章全体を概観しながら拾い読みする摘読をした。そして、同じ課題で多くの本を重ねたり並行させたりして読む多読を行い、自分たちのプレゼンテーションに必要な情報を取り出すことができた【類別・比較】。並行読書は、単元が始まると同時に進めた。しかし、児童がどれだけ読めているのかを確認すると、進んで本を読むことができていない児童もいた。そこで、並行読書の本に読んだ児童が付箋を貼ることにした。すると、どこを読んでいいかわからなかった児童が、友だちの読んでいた場所（付箋のあるページ）を参考にして進んで本を読めるようになった。それぞれ集めた資料から、必要な部分だけを取り出して、ノートにまとめていった【理由づけ】。（資料⑪）また、資料を集めるために、児童や保護者にアンケートを取ることでより説得力のある資料になった。（資料⑫）そして、アンケートはグラフ化することも既習の学習から学んでいる。（資料⑬）



（資料⑩ 並行読書（付箋入り））

並行読書しながら、取り入れたい事例や、興味のある事例には付箋を貼っていくようにした。付箋を貼ることによって、もう一度見返したい時も役に立った。

ル	大	宮	事	い	ン	と	大	北	事
全	型	崎	列	と	ト	各	型	海	列
体	店	県	2	言	で	種	室	道	1
で	の	宮		う	人	イ	さ	北	
に	点	崎		一	々	ベ	店	見	
ぎ	を	市		石	か	ン	ほ	市	
わ	結	内		二	に	ト	を	内	
い	ひ	ら		鳥	ぎ	事	活	商	
を	面	つ		で	わ	業	用	店	
創	へ	の		あ	い	を	し	街	
出	展	商		る	空	行	た	で	
	開	店			き	て	チ	の	
		街			店	い	レ	4	
	と				ほ	る	シ	の	
	ま				が	っ	シ	商	
	ん				む	ま	ッ	店	
	な				だ	り	フ	街	
	か				に		ッ		
	そ				な	イ	運		
					ら	ん	営		

（資料⑪ 集めた資料の中から、必要なところだけを書き出す）

アンケート

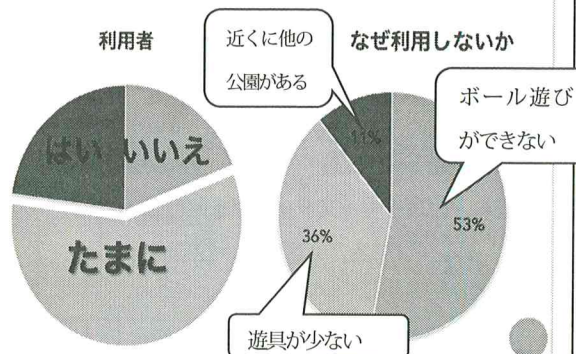
アンケート①松島公園は利用していますか？
↓
(はい・たまに・いいえ)

理由①いいえとまるした人は、なぜ利用しないのですか？
(理由)

アンケート②松島公園への不満があれば書いて下さい。
(不満)

（資料⑫ アンケート用紙）

4. 現状の問題点 学年へアンケート



（資料⑬ アンケートをもとにし、グラフ化している）

プレゼンテーションを制作するときに、ICT機器を活用することによって、各自が集めてきた資料を効果的に取捨選択することができた。例えば、分担して作ったシートを1つにまとめ、プレゼンテーションの構成を考える時にも順番を入れ替えたり、書き換えたりすることが容易であった【順序】。(資料⑮)資料が集まり原稿が書けたら、次は提案のよさが伝わる話し方を考えてプレゼンテーションの練習を行った。(資料⑯)

第Ⅲ次では、自分たちがえがいた「町の未来」についてプレゼンテーションをする活動を行った。(資料⑰)



(資料⑮) プレゼンテーション作成の様子)



(資料⑯) プレゼンテーションの練習)

1 ページ目

発表の進め方

0. 現状
1. 始めの言葉
2. 事例①
高島市の雑木林の再生 (滋賀県)
3. 事例②
大川上流の根室山 (岩手県)
4. 現状の問題点
5. わたしたちの提案

2 ページ目

0.現状

自然を増やすプロジェクトが
していい。

自然に保護している。

町を自然でいっぱいになりたい。

3 ページ目

1. 始めの言葉

わたしたちがえがいた未来の町

多くの自然に囲まれて人
と自然が触れ合える町

4 ページ目

2. 事例①「萌芽更新」
高島市マキノ町石庭地区 (滋賀県)

参考にしたこと
・萌芽更新をすることで自然をリサイクル
⇒自然を守ることが出来る

5 ページ目

3. 事例② 漁師達中心の植林
大川上流の根室山 (岩手県)

・参考にした事
・多くの人が植林に協力
・大人から子供までが参加できる

6 ページ目

4. 現状の問題点
大阪府の自然

7 ページ目

5. わたしたちの提案

提案の内容

1. 必要以上に自然を破壊しない
2. 一人一人が積極的に自然を増やすためのプロジェクトに参加する
3. 自然を生かして人と自然が触れ合える場をつくる

多くの自然に囲まれて人と自然が
触れ合える町

(資料⑰) 児童が作ったプレゼンテーション)

視点③ 指導事項と言語活動を踏まえた評価基準の設定と評価の在り方を明確にする。

- 毎時間学習課題を明確にもたせ、課題が振り返りの視点となるような評価をさせる。
- グループで交流して相互評価をしたり、学習後の自身の変容について自己評価したりさせる。
- 言語活動の中に、付けたい力が位置付けられているかどうかの評価基準を設定する。

毎時間の学習の終わりには、課題を意識した振り返りをノートに書く時間を設けた。児童が考えを発表した時に、聞いていた児童が自分の意見と比べて似ているところと違うところを見つけて相互評価を行うことができた。

プレゼンテーションを終えて、児童はノートに自己評価を書いた。「事例に合った言葉や写真を取り入れるところを工夫した。」や、「前に出てプレゼンをするので緊張するので、視線や身振りを意識するところが難しかった。」と、学習後の自身の変容について振り返ることができた。また、友だちの発表を聞き、相互評価を行った。評価の項目をプレゼンテーションの資料と話し方に大きく分け、プレゼンテーションの資料に関しては、「構成」「事例」「資料」の3つに分け、話し方に関しては、「声の大きさ」「適切な言葉」「視線」「身振り」「問いかけ・反応など」に分けて評価し合った。(資料⑱)

ボーラ A		3 班の発表 合計 16 点	
プレゼンテーションの資料			
構成	事例	資料	
3	3	3	
一言: アンケートを入れたことが良かった。			
話す			
声の大きさ	適切な言葉	視線	身振り
2	2	1	1
問いかけ・反応など			

タマシ A		3 班の発表 合計 17 点	
プレゼンテーションの資料			
構成	事例	資料	
3	2	2	
一言: 少し声が小さいと思う。目線と身振りをはっきりした方がいいと思う。			
話す			
声の大きさ	適切な言葉	視線	身振り
2	3	2	2
問いかけ・反応など			
1			

(資料⑱ プレゼンテーション後の相互評価)

(3) 考察 (成果・○ 課題・●)

視点① 付けたい力を分析し、明確化・系統化を図る。

- 全文を一枚のプリントにしたものから序論・本論・結論という構成を考えることができた。
- 前単元に身に付けた資料活用能力をさらに本単元で生かすことができた。
- レディネステストにより読み取りの力が足りていないという実態をつかめていたが、指導計画の中で、教材文を読み取る時間を確保することができなかった。
- 1時間の展開の中で、習得と活用を行ったが、時間内に学習を終えることが難しかった。

視点② 付けたい力にふさわしい言語活動を開発・設定し、主体的な学びを構築する。

- 児童が主体的に学習に取り組めるように、区長からのビデオメッセージを見せたり、指導者のプレゼンテーションを見せたりした。そうすることで、見通しをもって意欲的に学習することができた。
- バックキャストの手法を使って、考えたことを図式化することの大切さがわかり、その方法を使って自分たちの町の未来を考えることができた。
- プレゼンテーションをするために、本やインターネットから資料を集めたり、アンケートを取ってまとめたりして、主体的な学習を行うことができた。
- ICT機器を活用することにより、話し合い活動をスムーズに行ったり、発表の構成を組み替えやすくなり、やりやすかった。
- 自分たちの未来の町を考える時に、自分たちの町の現状から考えたために、希望あふれる未来を思い描くことが難しかった。

視点③ 指導事項と言語活動を踏まえた評価基準の設定と評価の在り方を明確にする。

- グループでの話し合いや、全体交流の場での相互評価により、自分の考えを変容させることができた。

Ⅲ まとめと今後の課題

高学年委員会では、「目的に応じて、文章全体から内容を把握し、自分の考えを広げるとともに書き手の意図や思考を想定して表現技法に気付き自分の表現に活用できる『生きてはたらく言語力』の育成」をめざし、三つの研究の視点を立て研究を進めてきた。

1 研究の成果

(1) 付けたい力を分析し、明確化・系統化を図る。

- 表現の工夫に着眼した教材分析を行うことにより、本単元で付けたい力を付けるための学習指導計画を工夫することができた。
- 学習の導入時に指導者によって作成した発表・プレゼンテーションのモデルを示したことにより、学習の見通しを明確に持たせるだけでなく、自分たちの発表・プレゼンテーションの準備の際の参考にすることができた。
- 教材文に使用されている資料の効果を考えることにより、自分たちの発表・プレゼンテーションに使う資料を選ぶことができた。
- 教材文に使用されている表現技法の中から自分が使いたいものを選んで視覚化(「マイスターノート」の付箋)することにより、分かりやすい説明を考えることができた。

(2) 付けたい力にふさわしい言語活動を開発・設定し、主体的な学びを構築する。

- 教材文に示された「バックキャストिंग」という思考ツールを理解し、自分でも使うことにより、自分の町のことを多面的に考えることができた。
- グループ交流や全体交流の前にノートやワークシートに考えを書く活動を入れることにより、自信をもって話し合うことができた。
- 「マイスターノート」に、資料から選んだ文や文章を付箋に書きためていくことにより、構成を考えやすくすることができた。
- グループ学習の際にＩＣＴ機器を活用することにより、たくさんの資料を保存したりより効果的なものを選んだりすることが容易になった。また、友達との考えを共有しやすくなり、話し合いが活発になった。

(3) 指導事項と言語活動を踏まえた評価基準の設定と評価の在り方を明確にする。

- 毎時間の学習の最後に、「振り返り」を書かせることにより、自己評価を探ることができた。
- 第Ⅱ次で学習したことを使って、次の時間に各自の活用の時間を設定したため、自力で発表原稿作成に取り組むことができた。そのため達成感があり、自己評価が高くなった。
- 発表を「評価カード」を使って相互評価したため、観点にそってスムーズに交流することができた。

2 今後の課題

- 習得の時間では、課題をさらに絞り込み、時間をかけて協働学習が行えるようにする。
- ペア交流やグループ学習の効果的な在り方を考え、児童の国語力向上が図ることのできる学習を工夫する。

書 写 委 員 会

研究主題

課題をもって、書写学習に主体的・協働的に取り組む力を育て、実生活につなげる。
 — 文字を大切にし、正しく整えて書こうとする子ども —

I 研究主題

1 主題設定の理由

国語科書写の学習は、「文字に関する事項」の指導や、「書くこと」の領域の指導と密接に関連しており、手紙を書いたり記録を取ったりするなどの実際の日常生活や学習活動に役立つようにすることが求められている。また、学習指導要領において、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に位置付けられ、日本の大切な文化として捉え、指導していくことも重要となる。

書写委員会では、児童が書写学習に主体的・協働的に取り組むことによって、自ら課題をつかみ、意欲的に学習に取り組もうとする力が育ち、グループで話し合っ自分の課題を見つけたり、アドバイスしたりすることで課題を解決しようとしていくための力が育ち、学んだ力を実生活に役立てる姿を目指す子ども像としている。

そこで、研究主題を「課題をもって、書写学習に主体的・協働的に取り組む力を育て、実生活につなげる。」とした。

2 研究の視点

研 究 の 視 点	具 体 的 方 策
視点① 付けたい力を分析し、 明確化・系統化を図る。	○児童の書写に関する意識・技能について実態を把握する。 ○書く姿勢、正しい鉛筆の持ち方を定着させる。 ○系統を考えて、既習事項と本単元の関連を図る。 ○文字を正しく整えて書くことの基礎・基本の技能を明らかにする。 ○書写学習で身に付けた技能を日常生活や学習生活にも生かして使う。
視点② 付けたい力にふさわしい言語活動を開発・設定し、主体的な学びを構築する。	○課題を把握することができるよう、教材・教具を工夫する。 ○書写用語を用いて話し合い活動ができるようにする。 ○自分の思いや考えを広げたり、深めたりすることができるように、交流の在り方を工夫する。
視点③ 指導事項と言語活動を踏まえた評価基準の設定と評価の在り方を明確にする。	○グループや学級全体で交流して相互評価したり、学習を振り返って自己評価したりできるようにする。 ○指導者のねらいと児童の学習課題を一体化させた評価基準になるように目標設定を行う。